The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	交流と断絶の占領期 ： 大阪大学周辺地域を中心に
Author(s)	西村, まりな
Citation	平成29年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2018
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　文学部　採択番号　No.　4

平成２９年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	にしむら　まりな 西村　まりな	学部 学科	文学部 人文学科	学年	３年
ふりがな 共　同 研究者氏名	まえかわ　たくと 前川　拓人	学部 学科	文学部 人文学科	学年	２年
	まつなが　たけまさ 松永　健聖		文学部 人文学科		２年
					年
アドバイザー教員 氏名	きたはら　めぐみ 北原　恵	所属	文学研究科 文化形態論専攻		
研究課題名	交流と断絶の占領期―大阪大学周辺地域を中心に―				
研究成果の概要	研究目的，研究計画，研究方法，研究経過，研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は，「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い，盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

1．研究目的

（1）　着想に至った経緯

大阪大学には，大正天皇の行幸碑や奉安庫など数多くの戦争遺跡が存在する。その中でも一際異彩を放つのが，現在刀根山寮として使用されている刀根山ハウス跡地である。刀根山ハウスは，占領期に伊丹空港を"Itami Air Base"として接収していた占領軍の家族用住宅として建設されたものであるが，その歴史を紐解くと，刀根山ハウスのみならず，占領期の大阪大学周辺地域は"Itami Air Base"に駐留する占領軍により大きく規定されていたことが分かった。本研究は，当該地域で生活をする人々の生活と占領軍との関係性を詳らかにすることで，大阪大学周辺における占領政策の影響を明らかしようとするものである。

（2）　何をどこまで明らかにしようとするのか

行政資料やプランゲ文庫に所蔵されている資料などにより当該地域における占領の全体像を探り，他地域の占領研究との比較によりその相対化を図る。また，一次資料の利用や聞き取り調査により，当時の人々が占領をどのように受け止めていたのかを個人の経験に即して検討する。これにより，占領期の大阪大学周辺地域の歴史を重層的に捉え，その意義を明らかにする。

（3）　研究の特色・意義

本研究の特色は，先行研究の少ない占領期をテーマとすることにより，大阪大学周辺地域の新たな歴史像を見出す試みにある。そのため，地域の人々と占領軍との関係性などにも新たな視座を与えることができる。また，本研究においては文献調査だけでなく，当時を生きた人々に対する聞き取り調査を行うことも重視している。公に語られている占領政策と個人における占領期の体験を照合することで，戦後の民主主義政策とともに語られることが多かった占領期の歴史像に新たな側面を見出すことが可能であると考えている。それは，現在まで続く我々の歴史観を再検討する営みに他ならない。

2. 研究計画・方法

（1）文献調査（7 月，8 月）

すでに 5 月より必要とする資料の収集に着手し，主に本大学図書館の蔵書を用いた文献調査に取り組んでいるが，7 月以降はより発展的に占領期に関する先行研究を調査し，並行して他地域の占領研究との比較研究も行う。なお特に本段階では，大阪府立図書館や岡町図書館など，地域の MLA 施設を活用する予定である。

（2）資料調査（7 月～9 月）

“Itami Air Base”と大阪大学周辺の旧版地図や行政文書などを用いて，当該地域がどのような変遷をたどってきたのかを明らかにする。この際，豊中市文書館にも協力を要請する予定である。また，国立国会図書館が所蔵するプランゲ文庫をはじめとした当該地域の占領に関する一次資料や，当時の新聞記事なども収集する。

（3）フィールドワーク（8 月～10 月）

占領期の当該地域を知る方々への聞き取り調査を中心としたフィールドワークを行い，その歴史的変遷を検証する。聞き取りの対象とさせていただく方々は，本学文学部人文学科日本学専修 2016 年度卒業生である平野真帆さんに紹介していただく（平野さんは卒業論文「空港門前町蛍池の歴史：米軍占領の影響を中心に」を執筆されている）。また，比較対象となる他地域として，最も占領期の実態が明らかになっている東京にて現地調査を行う。具体的には，横田基地の見学や現存する米軍ハウス（ジョンソンタウン，埼玉県入間市）への巡検を行うことで，占領期を多角的にとらえるひとつの契機としたい。

（4）分析・検証（9 月，10 月）

上記 1～3 で得た情報を多角的かつ複合的に整理・分析し，その整合性を検証する。また，必要に応じて，追加の調査を行う。

（5）　まとめ（10 月，11 月）

分析・調査で得た情報をもとに，研究成果報告書を作成する。本段階では，研究全体を振り返り，大阪大学周辺地域の個別具体的な占領体験が相互的関連性を持ち，なおかつ，他地域の占領経験や普遍的な占領体系とも交錯しているものとして検討することを目指す。

3. 研究経過

本研究は，概ね上記の研究計画に沿って行われた。ここでは，聞き取り調査の経過を示すことで，その報告としたい。はじめに，平野さんから蛍池のラーメン屋店主 A さん（男性）を紹介いただいた。この A さんの紹介により，2017 年 8 月 29 日に B さん（70 代男性，蛍池在住）とそのご子息の C さん（30 代男性，同上）に聞き取り調査を行った（B さんの職場にて）。9 月 12 日には，先ほどと同様，A さんの紹介により，D さん（80 代男性，蛍池在住）と E さん（70 代男性，同上）に聞き取りを行った（蛍池人権まちづくりセンターにて）。さらに，10 月 12 日には E さんの紹介で，F さん（70 代男性，蛍池在住），G さん（70 代男性，同上），H さん（80 代男性，同上）に聞き取り調査を行った（蛍池人権まちづくりセンターにて）。

また，蛍池人権まちづくりセンター職員の I さん（男性）にも，直接インフォーマントの方を紹介していただいた。インフォーマントの J さん（90 代女性，蛍池在住）には，9 月 12 日に聞き取りを行った。

またこの際に，センター職員のＫさん（女性）も聞き取り調査に参加された（蛍池人権まちづくりセンターにて）。なお，以下の文章では，聞き取りを行った方の名前をこのアルファベットに統一している。

4.　研究成果

はじめに

1945 年 8 月に日本が敗戦してから 1952 年 4 月に独立が回復するまでの期間を，一般に＜占領期＞と呼ぶ。占領期には，日本国憲法の制定や民主化政策の浸透など，戦後日本社会のあり方を決定付ける出来事が数多くあった。しかし，そのような重大な時期であるにもかかわらず，先行研究は他の時代と比較して数少ないうえ，それらは主に軍事史，政治史，外交史といった「大きな物語」を中心に論じられてきた。

このような問題意識の下，現在の伊丹空港が”Itami Air Base”（以下，IAB と表記する）として占領軍により接収されていたと知った私たちは，占領期が人々にとってどのように経験されているのかに興味を抱くようになった。そこで，本研究では対象を大阪大学周辺地域（主に蛍池地区）の住民に絞り，彼らや彼女らにとって＜占領期＞とはどのような時代であったのかを，⑴図書館や文書館での文献調査⑵蛍池地区での聞き取り調査⑶比較的占領期研究が進んでいる東京の巡検で得られた知見をもとに明らかにした。

以下，第 1 章では，刀根山ハウス（現在の大阪大学刀根山寮の場所にあった米軍ハウス）に対する人々の記憶を辿る。第 2 章では，蛍池地区に住んでいた子どもたちにとって，占領期がどのように経験されたのかを辿る。第 3 章では，当時を青年期として過ごした人々の経験を探る。そして，おわりにでは，本研究を踏まえた今後の展望や課題を述べてみたい。

（1）　刀根山ハウス

現在刀根山寮が建つ場所には，かつて刀根山ハウス と呼ばれる建物があった。1948 年から 58 年まで存在した白壁のそれは，当時伊丹空港を接収していた占領軍の家族用住宅として建設されたものであった 。芝生生い茂る敷地内に整然と立ち並ぶそれらアメリカ式の住居は，戦後すぐの混乱の中を生きていた人々から憧憬の眼差しを持って受け止められていたであろうことは想像に難くない。しかしながら，この建物が姿を消すのと軌を一にして，人々の記憶からも刀根山ハウスは徐々に忘れ去られていく。現在，刀根山ハウスについてまとまった記述がある資料は，管見の限り，『新修豊中市史』や『大阪大学 50 年史』程度である。そこでこの章では，現在薄れつつある刀根山ハウスの記憶を再度蘇らすべく，本研究を通して行ってきた聞き取り調査をもとに，刀根山ハウスについてのさらなる記述を試みたい。なお，当時の刀根山ハウスの様子を探るため，2017 年 9 月 18 日の東京巡検の際に，現存するアメリカンハウスであるジョンソンタウン（埼玉県入間市）を訪れたことを書き添えておく。

ここでは，A さん B さん C さんの 3 人への聞き取り調査をもとに，刀根山ハウスが人々からどのような印象を持って受け止められていたのかについて考えていきたい。3 人は全員蛍池周辺地域出身の男性であり，A さんと B さんは当時の遊び場であった刀根山（刀根山ハウスの南側）からハウスを眺めた経験があり，C さんは実際に刀根山ハウスの中に招待された経験を持つ。A さんの記憶には，壁のベージュに屋根の赤，芝の緑といった鮮明な〈色〉のコントラストが残っている。これは B さんも

同様で，B さんの脳裏には，白塗りの壁に屋根などをハイカラな色で塗りたくっていたというふうに記憶されている。いずれにせよ，これら原色塗りの家には，近くに置かれていた車などとともに憧れの眼差しが注がれていた。しかしながら，A さんも B さんも刀根山ハウスに近付こうとは一切思わなかったといい，憧れを持ちつつも自身の生活とは一線を画したものとしてハウスを受け止めていたことがうかがえる。

一方で，彼ら 2 人とは異なった（そして，おそらく稀な）体験をしたのが C さんである。C さんは，招待された刀根山ハウスでアメリカ人に（からかいとして）掃除機で手を吸われたことを，現在でも鮮明に覚えているという。彼の記憶に残る刀根山ハウスは，日本とアメリカの文化レベルの差を表す象徴として後年に再記憶されており，その記憶は〈驚き〉という形で深く身体に刻み込まれている。つまり，当時の日本人の貧しさと対照的に高度な文化を持ち合わせたアメリカ人という存在を，掃除機で手を吸われたという経験を通して身体に記憶しているのである。

ここまで見てきたように，経験の差などによって，3 人の記憶には濃淡や視点に差異が見られた。しかし，これら刀根山ハウスに関する記憶を〈占領期〉というより広範囲な文脈に照らしわせて考えるとき，そこに一つの共通性を見出すことができよう。それは，アメリカ文化の持つ豊かさへの憧れとともに，それに対して一線を引くことで自身と区別しようとする心情である。このような視点から刀根山ハウスを再度眺めなおす時，それは単なる数量的記録ではなく，一人一人の鮮やかな記憶として記述されるのである。

（2）蛍池の「基地の子」たち

昭和 28 年の時点で日本には 600 余の基地が点在し，それらの周辺地域に住む子どもは「基地の子」と呼ばれた［清水他編 1953：p.1］。前章で論じた「刀根山ハウス」をめぐる記憶も，蛍池で「基地の子」として生きた人々によって語られたものである。米軍の進駐は彼らの日常にどのように影響を及ぼしたのだろうか。本章では，蛍池の「基地の子」たちの体験と，彼らを眼差す大人たちの視点を考察したい。

聞き取り調査によって明らかとなるのが，占領がまず子どもたちの「遊び」の場面に反映されたという点である。待兼山周辺の池や小山は彼らの主要な遊び場であり，刀根山ハウスを眺めた記憶はそこで遊んだ思い出から引き出されていた。また，B さんや D さんによると、夏は IAB の敷地内にあった米軍の訓練用プールが開放され，専用の入構許可証（木製の札）を持っていた小学生はゲートを通過しそこで遊泳することができた。さらに，IAB へと続くアーケード・「テキサス通り」は，進駐軍の撤退後空き家が続出し，屋根に上って遊んでいたという人もいた 。これらのことから，子どもたちの「遊び」の空間やその記憶に米軍の進駐が強く結び付けられていることがわかる。

また，G さんの刀根山ハウスにおける一件からも示されるように，アメリカの生活文化に接触したときの衝撃は子どもたちに強烈な印象を残した。IAB 内でハンバーガーやコカ・コーラを初めて口にしたときのえも言われぬ感動，「テキサス通り」の衣料品店で販売されていた刺繍入りのジャンパーへの憧憬，隊列を組んで闊歩する優美な米兵の姿，自宅に隣接していた「パンパンハウス」（米軍を対象とした性的サービスを提供する建屋）の引き込み役の女性の風貌やそこに出入りする米兵からもらったチョコレートなど，占領軍との接触や占領によって身近な場面へ持ち込まれた文化との交流は，子どもたちの目に非凡で新鮮なものとして映った。なお，豊中市政だより［1954 年 2 月 5 日］によると，1954 年には豊中市の小中学校とトネヤマ・スクール（刀根山ハウスに暮らす子どもたちが通う学校）の生徒たちとの交歓会が開催された。豊中市の子どもたちが暖かい教室やアメリカの子どもたちの社交性に驚きな

がらも楽しい時を過ごしたことが報じられている 。このように，「基地の子」たちが異文化と出会うある瞬間における情動は，彼らの占領期の記憶の形成に密接に関わっているといえよう。そしてこれらの事例はいずれも彼らが幼い「基地の子」であったからこそ経験しえた占領体験であった。

一方で，蛍池の「基地の子」を取り巻く環境について問題化する風潮もあった。当該地域の様相は「けばけばしい服装をした女たちがそこそこ（ママ）に徘徊して，駐留軍兵士に呼びかけ，嬌声をあげて，人前をはばからず公然と戯れ，その痴態の限りをつくす」［大阪社会福祉協議会 2009 : p.45］と表現され，PTA や婦人団体などが連携して「子供の将来を考慮して，悪環境に毒されぬように指導」［同前］すること，間貸しを禁じることなどが喚起された 。蛍池小学校の校舎内においても，毎朝のように性行為の痕跡が発見されることもあったという［大阪平和を守る会豊中支部連合会 1963 : p.2］。また，飛行場で行われるジェット機の爆音が子どもたちの学習や睡眠に支障を与えていること，子どもたちがジープの事故に巻き込まれたことなどからも IAB への非難は集中した［猪俣他編 1953 : pp.148-156］。北豊島小学校新聞［1949 年 7 月 30 日］においても，「ジープ等スピードのある乗物に対しては細心の注意をすること」と児童に向けて喚起がなされている。

以上のように，蛍池の「基地の子」にとって占領期の生活は彼らの「遊び」の場との関わりやアメリカ文化との偶然の出会いに際する強い感情に結び付けられており，当時の地域の大人たちは彼らを取り巻く社会のあり方について，風紀上・教育上の懸念から，絶えず批判的に問題を提起していたことが明らかとなる。

（3）青年たちと Itami Air Base

前章では，幼少期及び少年期に占領期を生きた人々が IAB をどのように見ていたのかを示し，その交流について考察した。以下，本章では青年期に占領期を生きていた人々の IAB への視点とその交流について考察していく。

まずは，聞き取り調査に協力してくださった F さんの事例から見ていきたい 。F さんは占領期の時代に 20 歳代前半であり，現在も蛍池地域に住んでいる女性の方である。F さんによると，占領期に IAB のフェンスのところまで行けたこと，そしてそこから少し中に入ることができたこと，中に入ると先に進むことは出来なかったがチョコレート類のお菓子をはじめとした食料をもらえたことがあったそうだ。そのため，F さんは食料をもらうために何度か IAB を訪れたそうである。また，テキサス通りと呼ばれる IAB につながる繁華街にはたくさんのクラブがあり，それらは米兵とその関係者のみに入店が許可されていたそうだ。F さんの知り合いにも米兵と関係のあった方がおり，格闘技を鑑賞する店に入らせてもらったことも話していただいた。

次に，阪急電車が運行していた進駐軍専用列車に偶然乗り合わせた女学生の体験ついて見ていきたい。進駐軍専用列車は白帯車とも呼ばれており，昭和 21 年 4 月 25 日から 27 年 3 月 31 日までの期間に神戸線・宝塚線・箕面線・今津線の 4 つの路線で運転されていた。「私たちの学生時代」を発行する会［1999］によると，日本人が乗る列車は車窓に手すりがあるだけの動物の乗るような車両もあり，帰校時には満員で乗ることができないこともあったそうだ。その時，席が空いていた進駐軍専用列車が目の前に停まり，ホームにはその学生と友人しかいなかったこともあり，黒人兵から乗るように誘われたそうだ。その時の心情には「一瞬ひるんだ」「不安とありがたさ」そして降車した時の「やっと解放された気分」といったものがあった。これらの心情表現から，この女学生にとって占領軍は恐怖の対象であったと考えられる。その恐怖の対象である占領軍の兵士に親切にされたことに対する戸惑い，信頼しても良いのかという不安，普段よりも身近に感じることで生まれる緊張，そしてその親切

心に対する感謝等，数多くの感情がめまぐるしく動いていたに違いない。

最後に，*E.S.S.Times* から見る米軍と高校生との交流を考察したい。*E.S.S.Times* は占領期に豊中高校英語研究会が学校内において発行していた部活動新聞である。その新聞によると，当時英語研究会の会員だった Y さんが米軍の大佐 と友好関係を築いており，何度かその大佐が居住していた米軍ハウスを訪問していたそうだ。その交流の内容は彼らの家族と夕食を食べたり，その家の二人の息子とトランプをしたりというものだった。また，*E.S.S.Times* の表紙には，豊中高校の生徒と米軍兵が親しげに握手している様子が描かれている。これらのことから，豊中高校の生徒たちの中には米軍兵に対して，肯定的で友好的な感情を抱いている人もいたと考えられる。

これらの事例から，占領期における米軍との交流は必ずしも一般市民に米軍に対する嫌悪感を抱かせるものばかりではなかったことが言えよう。これらの交流はみな，米軍が一般市民に対して友好的に接していた証であり，その記憶が今に残っているのである。本章では占領期に青年期を生きた人々の記憶や記録を辿り，彼らと米兵との交流が友好的なものであったことを示した。以下次章では，本研究の考察と課題に関して言及していきたい。

おわりに

以上 3 章を通して，聞き取り調査と文献調査をもとに，IAB 周辺地域で占領期を過ごした人びとの体験をみてきた。進駐軍やその家族と接触・交流する機会，アメリカ文化との出会いの場は彼らの身近な生活場面にあらわれ，各々が新鮮で強烈な印象を伴ってそれらと向き合ったことが明らかとなった。もちろん，世代や性別，また個人を取り巻く環境などによってもそれぞれの占領体験は多種多様であり，一般化することは不可能であるが，本研究は生活史，地域史という側面に着眼した点にこそ意義があるものと考える。

ときに占領期は，戦前・戦中・戦後という時代区分からこぼれ落ち，さらにその体験を語ることのできる人の高齢化が進んでいるという状況から，現代史全体のなかで忘却の危機に瀕しているともいえよう。その一方で，占領期に関する一次資料は膨大に存在し，現在それらの整理が進められている段階である。そのような文脈のなかで，これまで先行研究においてほとんど言及されることのなかった個人の生活に根ざした占領体験を取り上げることは，当時の地域の様相や占領が地域住民にもたらした影響について具体的かつ重層的に検討するうえで不可欠なのではないだろうか。

なお，今回の調査では時間の制約上， GHQ・SCAP 文書を参照することができなかった。また，聞き取り調査からは「テキサス通り」をはじめとする当時の町並みについてもさまざまな情報が得られたが，占領期の IAB 周辺の公的な地図はほとんど発行されておらず，地理的な検討が不十分であった。さらに，インタビューのインフォーマントが当時蛍池地域にいた人に限定されているため，IAB 周辺地域を対象とする場合，より範囲を拡大した聞き取り調査が求められるだろう。これらの点を今後の課題とし，引き続き研究に取り組みたい。

謝辞

アドバイザー教員の北原恵先生をはじめ，日本学研究室の安岡健一先生，北村毅先生，宇野田尚哉先生，杉原達先生，冨永悠介さんには，研究の進め方について幾度となく丁寧なご指導を賜りました。また，卒業論文執筆者の平野真帆さん，快く聞き取り調査を引き受けていただいた地域の方々のお力添えがなければ本研究を進めることはできませんでした。ご協力いただいたすべての方々に対し，ここに感謝の意を表します。

参考文献

池田市史編纂委員会編 1997-2012『新修池田市史』池田市
伊丹市史編纂専門委員会編 1968-1973『伊丹市史』伊丹市
伊丹市博物館編 2009『大阪国際空港開港 70 周年記念：空港と歩んだ 70 年』伊丹市立博物館
猪俣浩三，木村禧八郎，清水幾太郎編 1953『基地日本：うしなわれいく祖国のすがた』和光社
浦原利穂 2004『終戦直後：大阪の電車：昭和 20 年代の鉄道風景：浦原利穂写真集』ないねん出版
大阪軍事基地反対懇談会事務局、関西軍事基地反対連絡協議会事務翌共編 1954『立ち上る！基地京阪神：原・水爆基地を日本からとりはらえ！』同事務局発行，佐藤（1996）所収
大阪国際空港 50 周年記念事業実行委員会 1990『翔：大阪国際空港 50 周年史』新曜社
大阪市史編纂所編 1985『大阪連絡調整事務局「執務月報」』大阪市史料調査会
――――――――― 1989『近畿連絡調整事務局「執務月報」』大阪市史料調査会
大阪社会福祉協議 2009「鳩の街“蛍ヶ池”と基地の子ら」『大阪社会福祉研究』第 4 巻 5・6 合併号
大阪大学五十年史編集実行委員会編 1983『大阪大学五十年史』大阪大学
大阪大学五十年史編集実行委員会写真集小委員会編 1981『大阪大学の五十年：写真集』大阪大学
大阪平和を守る会豊中支部連合会 1963『闘いの炎を燃やせ：伊丹空港拡張と軍事使用反対のために』大阪平和を守る会豊中支部連合会
小田博志 2010『エスノグラフィー入門』春秋社
岸政彦，石岡丈昇，丸山里美 2016『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』有斐閣ストゥディア
栗原彬，吉見俊哉編 2015『ひとびとの精神史：敗戦と占領 1940 年代』岩波書店
京阪神急行電鉄株式会社編 1959『京阪神急行電鉄五十年史』京阪神急行電鉄
小泉和子，高藪昭，内田青蔵 1999『日本の生活スタイルの原点となったデペンデントハウス』住まいの図書館出版局
坂口晴香 2011「豊中の歓楽街：占領期伊丹ベース」関西学院大学社会学部卒業論文
佐藤郁哉 2015『フィールドワーク 増訂版：書を持って街へ出よう』新曜社
佐藤洋一 2006『図説占領下の東京』河出書房新社
清水幾太郎，宮原誠一，上田庄三郎編 1953『基地の子：この事実をどう考えたらよいか』光文社
須崎慎一 2011「米軍基地・施設をめぐる日本のメディアと日本人の意識：R・R センター報道を中心に」『日本文化論年報』第 14 号（神戸大学大学院国際文化学研究科日本学コース）
ダワー，ジョン 2004『敗北を抱きしめて：第二次大戦後の日本人（上・下）』岩波書店
豊中市史編さん委員会編 1998-2010『新修豊中市史』豊中市
豊中市役所 1953『豊中市：総合調査報告書』豊中市
ハルトゥーニアン，ハリー 2010『歴史と記憶の抗争：「戦後日本」の現在』みすず書房
平野真帆 2016「空港門前町蛍池の歴史：米軍占領の影響を中心に」大阪大学文学部卒業論文
本井優太郎 2015「戦後地域社会における基地問題の生成と展開：伊丹航空基地とその周辺地域を事例に」『待兼山論叢：史学篇』第 49 号（大阪大学大学院文学研究科）
吉田容子 2010「米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応：「奈良 R・R センター」の場合」『奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告』第 7 号
米山リサ 2003「批判的フェミニズムの系譜からみる日本占領：日本人女性のメディア表象と「解放

とリハビリ」の米国神話」『思想』第 955 号（岩波書店）
「私たちの学生時代」を発行する会編 1999『神戸女学院のものがたり：専門学校最後の卒業生が巣立って 50 年』「私たちの学生時代」を発行する会
Johnson Town Club 2017a『Johnson Town Style：Spring 2017』Johnson Town
――――――――― 2017b『Johnson Town Style：Summer 2017』Johnson Town
――――――――― 2017c『Johnson Town Style：Autumn 2017』Johnson Town

新聞記事等
「情けの使者ブルドーザーきたる」『渋中新聞』（池田市立渋谷中学校）1948 年 9 月 28 日
「児童作品：作文」『北豊島小学校新聞』（池田市立北豊島小学校）1949 年 5 月 30 日
「米人家庭訪問記 “like and love”」『*E.S.S.Times*』（大阪府立豊中高等学校英語研究会）1949 年 7 月 4 日
「夏休中の心得」『北豊島小学校新聞』（池田市立北豊島小学校）1949 年 7 月 30 日
「日米交歓：トネヤマ・スクール訪問」『豊中市政だより』1954 年 2 月 5 日

参考 HP
“Itami Air Base in 1951” http://aranishi.hobby-web.net/3web_ara/itmbase2.htm（2017 年 12 月 8 日最終閲覧）

補足資料
『大阪大学新聞』（大阪大学新聞部，浪花高等学校新聞部）16 号（1948 年 12 月 23 日）- 23 号（1949 年 6 月 30 日）